

**立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)**

**大学院学生研究**

**2016年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院		キリスト教学研究科キリスト教学 専攻	
<b>研究代表者</b> (2017年3月現在のものを記入)	在籍研究科・専攻・学年		氏名	
	キリスト教学研究科・キリスト教学専攻・博士前期課程2年		大川 大地 印	
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏名	
	文学部・教授		廣石 望 印	
<b>自然・人文・社会の別</b>	人文		<b>個人・共同の別</b>	個人
<b>研究課題</b>	ポスト・コロニアル批評による新約聖書解釈の可能性と妥当性			
<b>研究組織</b> (研究代表者・共同研究者) ※2017年3月現在のものを記入	在籍研究科・専攻・学年		氏名	
	キリスト教学研究科・キリスト教学専攻・博士前期課程2年		大川 大地	
<b>研究期間</b>	2016 年度			
<b>研究経費</b> (1円単位)	(支出金額) 200,000円 / (採択金額) 200,000円			

**研究の概要** (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、ポスト・コロニアル批評を用いた新約聖書解釈の可能性と妥当性を検討することを目的とするものである。いかなる学問研究も、その時代のコンテキストや先行研究との連続性の中から生まれるものであり、90年代以降に誕生したポストコロニアル聖書学の潮流もその例外ではない。本研究では、ポストコロニアル聖書学がいかなる時代コンテキストや研究潮流との連続性から生まれたものであるのかを明らかにすることを第一の目標とし(妥当性)、具体的聖書テキストの解釈にこの新しい潮流がどのような貢献をなすものであるのかを明らかにすることを第二の目標とした(可能性)。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ポスト・コロニアル批評] [新約聖書解釈] [第三世界神学]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

## ①現代神学との方法論的接続

聖書学は、あくまで聖書というひとつの西洋古典を研究対象とした文献学であるが、一方で聖書はキリスト教の「聖典」／「正典」であり、キリスト教神学と方法論的に接続しつつ発展してきた。そのために、ポストコロニアル聖書学の方法論的妥当性を論じるためには、現代神学と聖書学の接続を論じる作業が欠かせない。従って、本研究はまず、解放神学やアジア神学などのいわゆる「第三世界神学」と呼ばれる神学思想の潮流の中にポストコロニアル聖書学を位置付けする作業を試みた。

## (1) 北米のポストコロニアル聖書学と解放神学

ポストコロニアル聖書学には現代、二つの潮流がある。一つは、歴史批評や社会学のアプローチを前面に押し出し、イエスや原始キリスト教をローマ帝国との関連から理解し、聖書文書をローマ帝国への「抵抗文学」として把握しようと試みる潮流である。これは現在、北米を中心に展開されている研究潮流で、この潮流に属する研究者の大半が現代のグローバル世界の中におけるアメリカの立ち位置に批判的なスタンスを取っている(とりわけこの姿勢が顕著なのが『イエスと帝国』の著者の R. ホーズリーと『神と帝国』の著者の J. D. クロッサン)。本研究は、北米を中心にしたこの第一のポストコロニアル聖書学を、解放神学との関連から理解することを試みた。

解放神学とは、1970年代に南北アメリカ大陸で誕生した神学潮流であり、人間の社会・文化・政治・経済の次元における「解放」をキリスト教の「救済」と重ね合わせて論じるユニークな神学思想である。この時代、ラテン・アメリカの多くの国では貧富の差が極端に拡大し、軍事独裁政権が横暴をふるっていた。北米でも、公民権が制定されたとはいえ、黒人差別は解消されず、黒人／白人間の貧富の差は拡大するばかりであった。南北アメリカの解放神学者たちは、「罪」を個人の内面や実存の葛藤に限定する従来のキリスト教の在り方を痛烈に批判し(むろん、従来のキリスト教の罪理解としては一面的に過ぎるが)、キリスト教は軍事独裁政権、富裕者、人種差別主義者の「犯罪」に向き合わねばならないと熱く論じた。このようなユニークな神学思想が、90年代以降に北米に展開されるポストコロニアル聖書学の第一の潮流の下地を作ったと言える。第一に、解放神学は「ポストコロニアル」というタームこそ用いなかったものの、南北アメリカ大陸の政治・経済・人種問題の背後に横たわる、キリスト教的西洋の植民地支配の問題を当初から適切に見抜いていた。ラテン・アメリカ解放神学における、キリスト教神学の批判的な捉え直しは、ラテン・アメリカの植民地におけるキリスト教の宣教の在り方への反省なしには理解できず、黒人解放神学が、「ブルース」や「黒人霊歌」などの「黒人文化」の分析に重きを置いたのも、奴隷としてアフリカから強制連行された黒人の「ルーツ」を強調するためであった。従って、解放神学こそが、キリスト教神学にポストコロニアルの問題意識を導入したと言えるのである。E. サイドや G. C. スピヴァクなどのポストコロニアル理論は、キリスト教研究の分野に限ると、解放神学の問題意識によりはっきりとした論理的基盤を与えたものであった。第二に、解放神学は、「解放者イエス」という独自のキリスト論の構築において、新約聖書学への関心を如実に示した。無論、従来の組織神学も聖書学に丁寧な関心を示していたものの、解放神学者たちは、「啓示」や「三位一体」などの神学思想から構築されるイエス・キリスト像を「抽象的」と批判し、新約聖書学の学問手続きによって再構築される歴史のイエスを「解放者イエス」のキリスト論を構築する際の土台としたのである。社会・文化・政治の次元における「解放者イエス」を提示することを目指した解放神学が、歴史的イエスを当時の社会・文化・政治から理解しようと試みた聖書学に関心を示したことは当然の流れであった。折しも、この時欧州では、社会学を文献学に導入する聖書学の潮流が脚光をあびており、これを受け、北米でも、神学思想よりもむしろ、社会・文化・政治の分野の方法論を応用したイエス研究の新しい潮流が誕生しつつあった。この新しい潮流の研究者たちの政治的立場は様々であったが、後にポストコロニアル聖書学の潮流に位置づけられる聖書学者たちはみな一様に、社会学や文化批評などの方法論を聖書学に応用することに積極的で、かつ解放神学への深い共鳴を公言していた。つまり、北米の聖書学の新しい潮流が解放神学のキリスト論の土台となり、同時に、解放神学の問題意識を、北米の聖書学者たちが自らの足場のアメリカの政治状況への批判を意識しつつ、新約研究につなげたことが、北米のポストコロニアル聖書学を誕生させることになったのである。

## (2) 「第三世界」のポストコロニアル聖書学とアジア神学

北米のポストコロニアル聖書学が、社会学の方法論を前面に押し出しつつ、歴史の再構成を現代アメリカの政治批評と結び付けることを主たる関心としているのに対し、いわゆる「第三世界」で(あるいはその出身者によって)展開されるポストコロニアル聖書学の第二の潮流は、聖書を現代社会の中でどのように読むことができるのか、という「解釈」の問題と、聖書を解釈する者の「立ち位置」や視点の問題に集中する。

例えば、イギリスのバーミンガム大学で教鞭をとるスリランカ人 R. スギルタラジャの研究は、聖書翻訳と植民地支配の力学の関係や、新約聖書学の「古典」とされる研究書に無批判に前提とされるオリエンタリズムの力学を暴露

**研究成果の概要 つづき**

することに向けられている。新約聖書学の「影響史」や「解釈史」を踏まえた上で彼が論じるのが、アジア人としての聖書解釈の読み手の役割の可能性である。

このようなポストコロニアル聖書学の第二の潮流の理解には、解放神学と同じく 1970 年代に誕生したアジア神学の影響を無視することはできない。アジア神学とは、アジアにおけるキリスト教宣教の在り方への批判と反省から生み出された神学で、「アジア人」としてのアイデンティティやアジアの社会・政治的現実への批判的行動をキリスト教神学と結び付ける神学潮流のことを指す。

この神学潮流がポストコロニアル聖書学の第二の潮流に結び付くことにも、アジア神学の二つの特徴を指摘することができる。第一に、アジアの文化よりも政治的な現実をより前面に押し出したアジア神学の一部の潮流は、解放神学と同じように新約聖書学への関心を如実に示していた。例えば、パク・チョンヒの軍事独裁政権下の韓国で生み出された民衆神学や、マルコスの独裁政権下のフィリピンで生み出された闘争神学がこの点では特に新約学への関心が顕著であった。民衆神学の指導者であった新約聖書学者のアン・ビョンムは、マルコ福音書に描かれる「民衆」と韓国社会の「民衆」を結び付ける独自の聖書解釈を提示し運動をリードしたし、フィリピンの闘争神学は、現代の新約聖書学では大きな疑問符がつけられているものの、「熱心党」とイエスの弟子集団の関連やパレスチナのローマ帝国への闘争をフィリピンの民主化闘争と重ね合わせる解釈を提示した。インドのアウトカースト集団ダリットの社会的解放とキリスト教神学の接合を試みるダリット神学もまた、イエス時代のパレスチナの「浄」／「不浄」システムの解明とアウトカーストへの差別の解放を結び合わせた。アジア神学における聖書学への関心が解放神学と決定的に異なっていたのは、アジア神学がイエスよりもむしろ、彼を取り巻いていた「民衆」の役割に注目した点である。アン・ビョンムは、従来のキリスト教神学の最大の間違ひはイエス個人の人格に集中しすぎたことだとまで言い、これではもはやキリスト教神学とは言えないとの批判を内外から浴びつつも、聖書はイエスと民衆の「事件」であり、イエスはすなわち民衆の一人である、と民衆の役割を論じた。アジア神学における聖書学への関心は当初から、イエスではなく、民衆の役割の方であったのであり、これがアジアのポストコロニアル聖書学で論じられるアジア人としての読み手の役割という議論につながっていくのは当然の流れだったのである。第二に、アジア神学は従来のキリスト教神学が無批判に前提としていた「普遍」と「超越」の神話に挑戦し、神学が生み出されるコンテクストの役割を最大限に強調した。つまり、西洋のキリスト教神学は、西洋というコンテクストの中から生み出されたものなのであり、それを「普遍」や「超越」とし、アジアにまで強制的に適用しようとしたのがキリスト教的西洋の植民地主義の失敗だったのではないかと、というのである。アジアには西洋とは異なったコンテクストが存在するのであって、そこから西洋とは異なったキリスト教神学が生み出されるのは当然であるし、また生み出されなければならない(無論、「アジア」や「アジア的」なコンテクストとは一体何のことか、それを強調することがかえって西洋人の「オリエンタリズム」を満足させることで終わりはしないかという疑問は生じる)。このようなコンテクストの強調は、新約聖書が生み出されたコンテクストの探究を目標とする新約聖書学の新しい潮流と親和性を持つものであったし、これが、聖書解釈や翻訳における西洋の「普遍」や「超越」への批判に連なっていくこともまた当然の流れであったと言えるのである。スギルタラジャや、上に指摘した民衆神学や闘争神学は、アジアの文化よりも政治的現実への関心を示すタイプの神学であるが、アジア神学には、キリスト教とアジアの伝統文化との接続を模索する流れもある。このような潮流からも、アルチャー・リーのように仏教や儒教の啓典解釈学とキリスト教の正典解釈学の比較と接合を目指す聖書学が生み出されている。アジア人としての聖書の読み手の役割、アジアの政治・文化的現実の中で聖書がどのように読めるか。アジアにおけるポストコロニアル聖書学の挑戦は続いている。

**②課題と展望**

以上のような神学潮流の中から誕生したポストコロニアル聖書学を、具体的な聖書テキストに適用する際の課題と展望について若干述べて、報告を閉じる。上に指摘したポストコロニアル聖書学の二つの潮流の方法論的接続性が解釈の際には当然問われることになるだろう。両者は共にポストコロニアリズムという視点や姿勢でテキスト解釈にのぞむと言う点で共通しているものの、テキストの背景にいかなる社会状況が存在し、いかなる社会状況からテキストが生み出されたのかという問いと、そのテキストを現在どのように使用するのかという問いは全く別のベクトルを持っているからである。先行研究に無批判に前提とされてきた植民地主義の力学の暴露は重要な課題であるが、そこに留まることなく、いかにテキスト解釈に積極的な貢献をなしうかが、今後ポストコロニアル聖書学にはますます問われてくるように思われる。第二に、植民地支配や帝国主義の支配構造が、性・人種・民族など様々な分野にまたがって構築されるものである以上、ポストコロニアル聖書学もまた、解放神学やアジア神学のみならず、フェミニスト神学やクィア神学などの複数の神学との批判的連帯が模索されているように思われるのである。

※この(様式 2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A 4 縦型横書き 1 枚・自由様式)を添付すること。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 大川大地 「ポストコロニアル神学／聖書学－課題と展望」立教大学大学院キリスト教学研究科『DEREK』第36号、2016年、19-40頁。

② 該当なし

③ 該当なし

④ 2017年4月2日 古代・東方キリスト教研究会例会発表 (於：東京大学駒場キャンパス)  
2017年4月17日 日本聖書学研究所4月度例会発表予定 (於：日本聖書神学校)